

## 序 文

開発経済学は、他の学問にはない固有の魅力を持っている。この魅力はどこから来ているのだろうか。このような問題を、この本では考えていきたい。

経済学から独立した固有の学問分野として開発経済学が成り立ちえるのか、という問題は、この分野に関わったひとが一度は行き当たるものである。ハーシュマンやラルのように、開発経済学が衰退している、という認識に立って、この学問の反省を行なったものもあるほどである (Hirschman 1981a, b; Lal 1985 [1983])。しかし、このような中にあっても開発経済学は多くの研究成果を生んでおり、それを学習する人も増えている。この事実が示しているのは「発展」や「開発」という言葉がひとを引きつけてやまない問題を提起していることである。

開発や発展の問題は、経済学の分析枠組みにかならずしも収まるものではない。むしろ、開発や発展について人が持っている思想、あるいはヴィジョンと経済学が会うことによって、開発経済学は生きた知識となって、人々の方法的な思考を促すことができる。シュンペーターは、個人のヴィジョンと研究者集団で共有されている経済分析のツールや研究上の手続き (vision and rules of procedure) との交渉の結果として科学的モデル (scientific models) が生産される過程を研究し、そのことによって経済学の歴史を描こうとした (Schumpeter 1954, pp.41-43)。個人のヴィジョンと分析ツールが交渉していく過程に起こっている思考のダイナミックな発展を学ぶことが、開発経済学を生きた知識にしていく方法であると筆者は信じている。

開発経済学の中にあるさまざまな立場の違いには、開発の中でなににこだわるのか、という思想の違いがあることは否定できない。ただ、思想の違いだけでとらわれることは危険である。開発政策のある問題で論争や対立があるということは、論争や対立ができるほどに、さまざまな開発経済学の研究者の間で共有される問題意識がある、ということも真実である。たとえば絵所(2002)にはインドの開発経済学者の間にあるさまざまな見解の違いが描かれているが、経済学者の間にインドの開発と貧困削減への情熱が共有されていると感じることができる。このようにして、間宮(1989; 1999)が試みているように、対立する経済思想の底に共有されている問題意識(あるいは「問題状況の共有」 間宮 [1989, p.ii])を明らかにすることは、開発経済学を学習する良い方法である。

開発や発展についてのビジョンが全てその時代の経済学によってとらえられているかという点、必ずしもそういうわけではない。時代を通じて人々をとらえて離さない発展と開発へのビジョンの一部をまとめたものが個々の開発経済学の理論であると考えれば、過去に提示されて、いまは注目されない理論であっても、開発問題のある一部については、現在通用している理論に比べて、問題の本質を正確にとらえている、ということもある。したがって、根岸(1983, pp.3-7)が述べているように、過去の経済学理論が復活して、現代の問題に新しい視点を提供することもできる。筆者は、開発経済学を学ぶということは、新しい現実の中で、これまで提案されてきた理論の潜在的な可能性を引き出す能力を学習者に授けることだと考えている。

この本では、経済成長理論や厚生経済学といった経済学の枠組みに収まらない開発や発展についてのビジョンと経済学との交流という視点にたって、開発経済学のアイデンティティを考えることにする。

第1章は経済成長理論と、開発主体の意思と能力にこだわる研究者との交流をまとめたものである。経済活動はものとひととの関わりによって生まれる。ものの素質をひとが引き出し、ひとの能力の不足を用具が補うというプロセスによってダイナミックな経済発展が実現する。機械を増設する投資と

いう作業も、新しい目標を設定し実現しようというひと（組織）の意思と能力に裏づけられている。このような問題意識を持った研究者が長期経済成長の理論的・実証的研究に参加し、そこから新しい理論へと脱していったプロセスを紹介したものが第1章である。なお、この章は、Cowen and Shenton (1996) の考察から示唆を受けたものである。

第2章は、経済成長と厚生経済学からはみ出る要素を持ったものとして、ベイシック・ヒューマン・ニーズから人間開発へと流れる福祉指向の開発思想の流れをまとめている。ものとひとの関わり合いという事実は経済発展だけでなく、ひとの自立と福祉を考える上でも重要であると筆者は考える。使うひとの状況を考えることなくものや情報が与えられても、ひとはそれを使いこなすことは難しい。しかし、与えられたものや情報や機会をよりよく使うという本人の動機づけと努力がなければ、社会がひとの福祉を支援するという自体が意味を持たなくなる。経済成長と福祉指向の開発思想とのやりとりは、ここでみてきたような自立と福祉をめぐる固有の問題に関わっている。

第3章は、開発途上国の歴史的固有性をとらえる概念として構造と制度を取り上げる。開発経済学の研究を動機づけるものの一つは、先進国とは違った社会の自立と発展の可能性である。このような開発途上国の固有性をとらえる概念として、構造と制度は基本的な概念であった。構造と制度はまた、ともに変化できるという側面と、時代を通じて存続し、世代を通じて継承されるという安定性を持っている。構造や制度のどちらの側面を重視するのか、という問題意識の中に、研究者の開発・発展へのヴィジョンが反映されている。この章はホジソンの議論 (Hodgson 2001) に示唆を受けて書かれたものである。

第1章の「資本」と「能力」の対比は、第2章で「ひとの自立と福祉のための機会（資源）」と「能力」の対比として繰り返し言及されていることと深く関係している。また第1章のテーマの一つである革新とルーティン（平凡な経常活動）との関係は、第3章の構造と制度における変化可能性と安定

性の議論と深くかかわっている。また第3章の構造と制度の問題は、結局は個人の自立・発展と社会(国家や地域)の自立・発展との関係をどのようにみていくのか、という大きな問題として、第1章、第2章のテーマと深く関わっているのである。

この本は開発経済学の思想史をまとめるという形をとっている。しかし思想史というのは単に思想について書いてあるというだけでなく、開発という言葉が私たちに対して、思想の問題として切実に感じられるのはなぜなのか、という問題を考えたいという意味である。また、この本では経済思想を年代ごとに整理して順に追っていくのではなく、問題に応じて歴史を再構成する方法を採用した。過去の先駆的な仕事を行なった開発経済学の開拓者と、その先駆性を現代に生かそうとする現在の研究者との対話として開発経済学の流れをとらえたいからである。最後に、本書ではさまざまな経済学者の見解を比較しながら議論が展開されるけれども、単にいろいろな見解のメリット・デメリットを比較するということはない。たとえ主流派の経済学とは一線を画した研究者であっても、主流派の経済学の成果から学習し、それを乗り越えようとしている誠実な態度を持って開発問題に取り組んできたからである。筆者が試みたかったことは、思想信条も方法も違った経済学者たちを引き寄せ、出会わせ、激しく論争しあうような状況を用意した「開発」「発展」という言葉の持つ大きな問題の展開を描くことなのである。

#### 参考文献

##### 日本語文献

- 絵所秀紀. 2002. 『開発経済学とインド 独立後インドの経済思想』日本評論社.
- 根岸 隆. 1983. 『経済学の歴史』スタンダード経済学シリーズ 東洋経済新報社.
- 間宮陽介. 1989. 『ケインズとハイエク 「自由の変容」』中公新書906.
- \_\_\_\_\_. 1999. 『市場社会の思想史 「自由」をどう解釈するか』中公新書1465.

英語文献

- Cowen, M.P., and R.W. Shenton. 1996. *Doctrines of Development*. London and New York: Routledge.
- Lal, D. 1985. *The Poverty of Development Economics*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press (初版は1983年に出版).
- Hirschman, A.O. 1981a. "The Rise and Decline of Development Economics." In Hirschman (1981b: 1-24).
- \_\_\_\_\_. 1981b. *Essays in Trespassing: Economics to Politics and Beyond*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hodgson, Geoffrey M. 2001. *How Economics Forgot History: The Problem of Historical Specificity in Social Science*. London and New York: Routledge.
- Schumpeter, J. A. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. (東畑清一訳 『経済分析の歴史』 岩波書店 1955年)